

森に入ってみると、ゾウに出会いました。後を追うと、ゾウはだいすきなエレファントグラスをおなかいっぱいになるまで食べています。

エレファントグラスは栄養価が高いため、人はこれを干して健康茶として飲んでいました。森にはゾウの好きな食べものや、人の薬となる植物がいっぱいあったのです。



ゾウは次に、ショウガのなかまの植物も食べはじめました。くきや葉っぱがよほど気に入ったのか、30分以上も食べつづけていました（右写真）





群れからはなれた1匹きのクロザルの後をついて行くと、「メンクデュ」という実を食べはじめました。スラウェシ島の北東部と、島の東にあるモルッカ諸島がこの植物の原産地です。

メンクデュの実はひじょうに苦く、人はそのままではとても食べられません。しかし先住民たちは、血圧を下げたり、すい臓や胃の調子を整えたりする薬として大切にしてきました。

ここにくらす先住民は、「サルなどが食べるものなら毒ではないと教えてくれているし、動物も具合が悪くなると、いつもは食べない植物や土を薬のように食べるんだよ」と話してくれました。



今では世界中で薬として注目されているメンクデュ。日本ではノニという名前で知られ、おもに健康食品として売られています。ハワイやパラオでも育てられていて、世界に輸出されています。



年間をとおしてあたたかい熱帯に育つ果実の多くは、薬としても使われています。市場に立つ女性のすぐ横にある丸い赤むらさきの果実はマンゴスチンといい、かんそうさせたものはがん治療に役立てられていました。もちろん、野生の動物たちの大好物でもあります。

このように人びとは、動物たちが教えてくれた森のめぐみによって、食文化だけでなく、健康な体をつくるための知識も豊かに身につけていったのです。



市場で売られるココナッツ

ココナッツは、火にかけて炭状になったものを水でとかし、アトピーや虫さされの薬として使われていました

